Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-11

(二〇二〇年度　社会調査演習調査報告)コロナ禍における災害の語りの変化 : 東日本大震災の語り手の事例からオンラインの可能性に迫る

吉田, 涼一

(Citation)
社会学雑誌,38:277-288

(Issue Date)
2021-07-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0042507

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042507

二〇二〇年度　社会調査演習調査報告

コロナ禍における災害の語りの変化

――東日本大震災の語り手の事例からオンラインの可能性に迫る――

吉田　涼一
神戸大学文学部人文学科

一　はじめに

大災害が発生するとその記憶を後世に遺すための取り組みが行われる。石碑や記念館の設立、震災遺構の保存など、その取り組みは目的に応じて様々であるが、その中でも大きな役割を果たしているものに、被災者や遺族による語りが挙げられる。

災害大国である日本は毎年のように大きな自然災害に見舞われているが、二〇一一年に甚大な被害をもたらした東日本大震災による影響は今なお続いており、その語りは今でも色褪せない記憶を伝えている。東日本大震災の被災地では復興ツーリズムやスタディツアーが挙行され、来訪者に被災地の姿や物語を伝える語り部ガイドも成立し、活躍してきた（西坂・古谷 二〇一八）。語り部ガイドの体験は、体験者の命の大切さや災害の記憶の継承に関する意識変化に効果的に関係しているとの指摘もある（佐々木・山本清瀧・山本信次　二〇一八）。

しかし、コロナ禍という新たな未曽有の〈災害〉は人の移動を制限し、被災地を訪れて語りを聞くことが困難な状況を生み出した。誰もが当事者として直面しており、従来の活動ができない環境下で、災害の語りはどのように変化したのだろうか。

本稿では東日本大震災の教訓を語り継ぐ活動を行うT夫妻の事例を取り上げ、コロナ禍という非日常の中での語りの意義や手法の変化について、主にオンラインでの記憶継承について考察する。なお、本稿は神戸大学文学部開講の授業「社会調査演習」において行った調査の報告である。[1]授業の性質を踏まえ、伝える活動におけるオンラインの可能性と限界という視点から、他の学生による学校教員への聞き取り内容も比較検討の対象として議論を進める。

二　調査対象、調査方法

二・一　調査対象

本調査における聞き取りは、東日本大震で息子を亡くした六〇歳前後のT夫妻を対象者として行った。彼らの息子は勤務していた宮城県女川町の銀行で、津波に飲まれて亡くなった。それ以降、T夫妻は安全安心な社会の実現に向けて、命の大切さや息子の死因に関係する企業防災について伝える活動を行っている。具体的には、亡くなった息子が勤務先していた銀行の跡地にモニュメントを設立、マスメディアでの発信、大学の講義やイベントで、そして女川への訪問者に対しての講演などを行っている。

なお、世間一般の認識では「語り部」と呼ばれる存在だと思われるが、本人の認識を尊重し本稿では「語り手」と表現する。

二・二　調査方法

筆者と調査対象者双方の自宅よりZOOMを用いて、一〇五分間の聞き取り調査を行った。聞き取りを行った日時は二〇二〇年八月二二日であり、筆者が二〇一九年三月に参加した東日本大震災のスタディツアーの講演者として知りあって以来の接点である。

本稿は上記の聞き取り調査の文字起こしを一次データとして分析した質的調査である。分析には他の学生による同様の聞き取り結果も用いているが、災害の語りという性質は共有していない。属人性の大きい、限定的な資料による分析であることに課題は残るが、それでも社会学的に意義のあると考えられる点に注目して考察を進める。

三　語られた内容の紹介

本章では小考察も交えながら聞き取りの内容を紹介していく。なお、引用の際には便宜上、筆者の発言は「吉：～～」、T夫妻の発言は「夫：～～」「妻：～～」と表記する。

三・一　語りを始めたきっかけと立場の認識

はじめに、分析の背景となる、T夫妻が語りを始めたきっかけや、「語り部ではない」という認識について確認する。

三・一・一　語りを始めたきっかけ

T夫妻の息子は発災から半年間は行方不明のままだった。行方不明の間、T夫妻は居住地の宮城県大崎市から女川町を何度も訪れ、銀行の跡地で息子が帰還するのを待っていた。その後、銀行の建物が解体され、瓦礫がなくなることによる問題の風化を防ぐために、そして、銀行の場所やこの事案があったことを知ってもらうためにプランター

を設置した。そこに集まるようになった人々との交流が、語りを始めるきっかけとなった。

夫：朝から晩までずーっとそこにはいるんですけど、その時に、まあ誰も話す人もいない。最初から話そうなんて思っていないので、夕方暗くなってぽつーんと、だれかがこう一人二人ってこう横倒しのビルをこう眺めている人がいるのね。で、その時に声をかけて、例えば「どこから来たんですか」っていつもこう、そういう聞き方をしたんだけど、例えば「関西です」って言うと、「んー、どこ？」って言うと「大阪です」ってなって、で横倒しのビルを見てると、「これ、横になって四階建てだよ」と言うと、「えー！これ横になってるんですか！」って自分の顔を横にして眺め、あーこれ本当に横になってるんだっていう話がでてきたわけですよ。ということは、なんかここであった事実を自分なりにきちんと伝えることも必要なんだろなって。

夫：自分の反省もあったわけですよ。で、反省ってなんだっていった時に、すべてこういった事故とか災害を見てて、かわいそうだねとか、大変だねとかね、いうよくお話をしてて、やはり自分のことやはり真剣に考えていたかったということがすごくこう分かったわけですよ。

T夫妻は今でこそ語り伝える活動に集中しているが、T夫は一昨年まで会社に勤務しながらその傍らで活動を行っていた。発言からも読み取れるように、語りたくて語り始めたのではなく、他者との関わりの中で自然と語るようになっていった。そして、語ることを通して使命感や、過去の災害を自分事として考えられていなかったことへの後悔の感情が整理され、語り手、そして遺族としての立場が形成されて今に至ったことが伺える。この当事者性の形成過程も非常に興味深いが、それはまたの機会に考察するとして、こうした背景が次に確認する「語り部ではない」という認識の基盤となっていることに注目したい。

三-一-二 「語り部」ではない

夫：一通りすると語り部になっちゃうんだけども、自分的には語り部ではないと思ってるんですよ。

吉：そうなんですか？

夫：うん、ようはまあみなさんに言うんだけども、語らざるを得ないというかな、そういう環境になっていたんだね。

夫：うまく言えないんだけど、普通にこうこんなことがあって、こういうことがありましたよーって、こう伝承的なことがなんか語り部ってかさ、そんな感じなんだけど。我々はこう問題提起をしているってかさ、うん。だからただこういった事案があるんだよっていうんじゃなくて、やはりまだまだ解決していない問題があるから、それをこう発信をして解決していきたいって想いがあるから、ただ語ってんじゃなくて、やはりそこについては問題の解決を模索しているっていうかな。そういうところが違うんじゃないかな。（中略）うん。だから、私的にもちょっと、ただ伝えればいいんだ、こういうことがありました。じゃなくて、まだまだ解決しないことがあるから言い伝える、そこでみんなで共有して考えるっていう話をさせてもらってるっていう認識なのかな。うん。

Tの認識では語ることを目的とするのが語り部で、語りを手段として用いることで社会を動かしていくのが自らの立場のようである。さらに、以下に見られるように息子に対する慰霊とその教訓の意も活動の根源となっており、それが語り手としての立場を形成していることが見て取れる。

夫：やはり息子の命を生かしながら学んだことを伝えていく。で、それが息子にいつか会った時に「あなたの命はこう大きな役目を果たした」っていうことを伝えられるように活動していくってかな。それはもう、根源なので。うん、そんな想いでこう日々をね、やっているということだよね。

妻：（命の授業に関して）息子がそれできなかった分、みんなにはしてほしいなっていう想いもあるのでね。そういう意味でこう命の大切さを伝えると、何か感じてくれんじゃねえかなっていうところで、そのお話もさせていただいてるところです。

以上のようなバックグラウンドに加え、銀行との裁判の際に同様の事案が見つからないことに苦労したこともあいまって、T夫妻は後世に語ること、遺すことに重きを置いている。そして繰り返しになるが、遺すだけでなく、それを通して社会が抱えている問題の解決を目指す点に「語り部」との相違点を見出している。この特性がコロナ禍での対応にも見受けられる。

三-二　コロナ禍での対応
――オンラインという選択肢――

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、四月、五月に当初予定されていた話す機会は全てなくなってしまったという。しかし、過去の活動で縁のあった団体の紹介がきっかけとなり、オンラインでの活動を始めることになった。

夫：まず自らこうテスト的に、女川にはこうスタディツアーもできないんだけども、まずパワーポイントとか、一応ビデオみたいなのもあるから、それを見てもらって、でまあ、本来では三現主義で、現地に来て風景は変われどその所の雰囲気を味わいながら想像を巡らせてほしいってことを言ってるんだけども、まずその前段階として、やはりその、パワーポイントや映像を使って私たちのお話をして、（中略）とにかく自分でこう話す場を探そうと思ったわけですよ

夫：ロンドンの方が参加をされて、時差はあるけども、一緒に話とかディスカスをしたとかね。やっぱ幅がこう、コロナの中でやはりＺＯＯＭを使った時に幅が広がった、というものもある。あとそれは、いざ終息した時に現地に来てもらうための種まき。あとは知らなかった人にこう広く伝えてもらう手段にもなってんのかな、ていうふうに思います。

オフラインでの活動が制限される中、様々な業界でコロナ禍に適した形へと活動の内容を変える取り組みが行われていることは周知の通りであるが[2]、災害の語りについても同様のようである。T夫妻は当初は不安を覚えていたが、女川に来られない人にも伝えられることや、終息後の現地訪問に向けた導線となりうることに、オンラインの魅力を見出していた。

また、オンラインで語ることに関しては以下のようにも話していた。

妻：やっぱりね、被災地の、現場の全体の雰囲気っていうのがなかなか感じ取れない感じですよね。聞いてもらえる人にもね。やっぱり私たちがずっとこの現場にこだわってきたのは、この件に関しては海の近さと、山の近さと、避難場所の近さ、それをまず感じてもらって、肌で知ってもらったうえでのこの事案を聞いてもらって考えてもらうことだったので、そういう意味で、あんま全体の雰囲気、風景の雰囲気を感じ取れないのはオンライ

ンではちょっと残念ですが。ただ、今はもう女川もかさ上げがだいぶ……ね、高くなって、元々の場所というところでは一番高かったのが一番低くなっている状態なので、もうそもそもがやっぱり、その当時の被災の雰囲気とはもう女川はもうかけ離れているので、そゆ意味では、まあ、そんなにこのオンラインでやってあの当時の写真を見ていただいた形とは、そんなに変わりないんじゃないのかな。とは思うのですが、でも、やっぱり現場は現場ですね。

妻：何百人という講演のところにも行ったことありますけど、そういう時にも最終的にやっぱりあの、質問をいただくような形にしてるんですけど、でもそういう大勢のいる中で「はい！」って手を挙げて質問する人もなかなかいないのよ。そういう中で、こういうパソコンで、そういうふうにZOOMでやると、なんかざっくばらんな感じで、我々の受けた答えをざっくばらんな話で受け答えができるっていうのが、なんか、そういう意味であってもいいんじゃないかなって。あの、形式ばった堅くなった雰囲気ではなく、ざっくばらんな雰囲気でできるってのもいいのかなって感じですけども。はい。

オンラインでも語りの内容は大きく変わっていないが、ビデオ会議システムが作り出す双方向的なコミュニケーションの取りやすさや、理想の雰囲気の作りやすさが効果的に働いているようである。一方で、五感に訴えかけるような現場ならではの感覚を届けることには苦労しているようである。

なお、オンラインの活用はコロナ禍というイレギュラーを迎えた結果生じた選択肢であった。誰でもビデオ会議を簡単に使えることをT夫妻は知らなかったが、コロナ禍において活動の新しい選択肢として浮上することとなった。新型コロナウイルスの感染終息後についても以下のように話していた。

妻：今まで私たち講演で女川以外だから遠くまで行って、時間をかけて経費をかけて行ってたわけですよ。ね。そういうものだと思ってたから。ところがところが、今言ったように、こういう形で全国、海外までこうできるんであれば、もちろんその現地に行ってお話することもそれも絶対必要なことですけど、ベースとしてこういうやり方も、我々のこれからの活動で十分にアリだと思います。

オンラインとオフライン、それぞれの魅力を活かし、組み合わせたものがニューノーマルの語りになるのだろうか。この点は後程詳しく考察する。

三・三　コロナ禍の対応――安全安心な社会――

安全な社会のために活動し、また相互に慰霊に関わる震災や事故の遺族コミュニティが存在する。T夫妻もその一員であり、安全を主張する立場を取ることから、自粛や感染拡大防止が求められる社会情勢の中で、「慰霊とそれとは別物だろう」という考えはありつつも、やりにくさもあったようである。毎年訪れていた事故現場での慰霊を諦めるなどの影響があった。

T夫妻が活動を行う女川町は人口六三〇〇人程度の小さな田舎町であり、調査時点では新型コロナウイルスの感染者は確認されていない[3]。安全を主張している以上、感染リスクを高める目立つことはできないという葛藤が生じていた。それが先に見たオンラインでの活動を推進していたようだ。

夫：まあ、だからコロナ禍でも、なんかやり方を考えれば、なんかこう光も見えてくるのかなと。ただね、やっぱり直接ね、話をした方がいいっていう時は多々ありますけど。ただ、今こういう状況で、私が来て来てって言うことは当然できないんで、まずは一番、安全安心ということを考えて、自らこう色々リスクを回避するっていう必要があるんじゃないかなというふうに、今の現状思っていますね。

妻：そうそう。それこそ我々が安全安心な社会へなんて、そんな感じでお話している中で、ちょっとリスクをしょったうえで、こんなんでこういうことして、で、コロナになっちゃったってなったら、目も当てらんないっちゃーね。こういうことを考えると、やっぱり、安全、最悪を想定した形で、一番安全な方法を取らざるを得ないっていうのが、すごくちょっと歯がゆいところでございます。はい。

また、以下のようにも語っていた。

妻：経済は二の次でいいじゃないかと。ってどうしても思うんだけど、なぜか政府は経済も。経済が上なんだよ結局。どうしても私、我々の件に合わせてしまうと、経済合理性は二の次でいいんだってずっと言ってきた。人命最優先だよと、言ってき

ている中で、コロナなんか、今なんか人命二の次だ。まさにそうじゃないすか。

夫：まあ、まだまだ変わっていないから、これをもう言い続けるっていうことだね。やはりね。あとはそうだね、まあとにかく愚直にやるしかないと思ってるね、続けて。

本稿では紹介していないが、複数の企業からコロナ禍での安全な働き方や、マスク着用を巡る安全意識の差から生じるトラブルに対する相談を受けていたとも語っていた。活動の成果が問われるコロナ禍という新しい〈災害〉に直面し、安全な社会に向けて日本社会や企業の体質の変わることのできた良い側面と、未だに変われていない側面とが浮き彫りとなった。

四　分析と考察

以上、T夫妻への聞き取りの内容を具体的に見てきた。ここからは調査内容を踏まえ、主に語りを用いた震災の記憶継承に関する先行研究を参考にしつつ、オンラインでの記憶継承活動の可能性と限界を明らかにするための考察を進める。

四・一　コロナ禍でのオンラインで伝える活動

T夫妻の話した内容からは、語り伝える活動がコロナ禍でスムーズにオンラインに移行できたことが分かる。元々関係のあった大学のゼミで、教育の一環でオンラインの講演を実施したという話もあった。では、語り伝える、教える活動は一般的にオンラインでも可能なのだろうか。オンライン授業の賛否を巡り論争が巻き起こった学校教育におけるオンラインと、記憶継承におけるオンラインでの伝える活動を比較して考察する。

ここで、二〇二〇年度神戸大学社会学専修の「社会学調査演習」にて行われた他の調査結果を参考にした考察をおこなってみたい。藤田のどかが聞き取りを行った地方の現役教員はオンライン授業の実施は小中学生では難しいと語った。その理由には、端末を全員が所有していないというハード面の問題、低学年になるほど抽象的な言葉が通じないという年齢と習熟度の問題、教員のノウハウの不足の問題の三点が挙げられた。ノウハウの課題はT夫妻も最初は不安に抱いていた問題であり共通するが、前者二点は対象者の前提が異なり、学校教育の難しさであるように思われる（藤田　二〇二一）。他の履修者である松浦信が聞き取りを行った兵庫県の教員も同様に、ハード面の問題や小中学生の能力の問題を指摘していた（松浦　二〇二一）。

コロナ禍での学校教育のオンライン化については、特に

公教育という性質に基づく平等性の確保と、教員と生徒双方の能力が課題となっているようだ。前者については学校特有の課題であり、自由に伝える活動を行うことのできるT夫妻には影響のなかった課題である。むしろ聞き手の幅が広がったことに好感を抱いていたT夫妻とは対照的な課題である。一方で能力に関してはどうだろうか。T夫妻の活動を含め、小学校低学年相当の子どもたちに対して災害の記憶を伝えることや、それに類似する社会教育を行う取り組みが一定数行われていることも事実である。[4] 当然、オンラインへの対応力やオンラインで伝えられることの限界はあるだろう。しかし、このような社会教育がオンラインでも成功するのであれば教員による主張の正当性は損なわれる。さらには、生徒の理解力の不足を指摘するのであれば、コロナ前から教育の場で行われていた社会教育が本当に目的を果たすことができていたのかを根本的に見つめ直す必要があるのではないだろうか。

「オンラインでの伝える活動」は一概に同様のものではなく、対象者の年齢や能力、身の回りの環境によってその可否が変わることが分かった。一方で、本当にその可否が変わるのか、認識されている課題が根本的な課題なのかについては、さらなる検討が必要であるように思われる。[5] 現時点ではオンライン授業を実施する学校は少ないが、将来的に災害の語りのノウハウが教育に応用できる可能性を示唆したい。

四・二　記憶の継承におけるオンラインの可能性と限界

四・二・一　先行研究より

ここまでコロナ禍の学校教育と比較しながらオンラインでの伝える活動について考察を進めてきた。ここからは震災の記憶継承に関する先行研究を踏まえてオンラインでの災害の記憶継承の可能性について考察をしていきたい。

矢守・舟木（二〇〇八）は阪神淡路大震災の語り部活動におけるアクションリサーチから、語り手が語ろうとする「震災の語り」と聞き手が期待する「防災の語り」の接合の問題について報告した。矢守はバフチンの対話論を参考に、語り部の語りがしばしば一対多の構図を持ち、それゆえに語り部の言葉が「権威的な言葉」となってしまうことに注目し、双方向的な応答を繰り返すことで「ジャンル」が再編成され、「内的説得力のある言葉」に語りが変わる可能性を指摘した。T夫妻は受け答えのしやすさをオンラインのメリットとして挙げていたが、語りの中で聞き手との応答をしやすくなったことが、実感を伴って語りの効果を大きくしているのではないだろうか。

一方で佐藤・邑本・新国・今村（二〇一九）は震災の語りにおいて、語り部本人による生語り、弟子による生語り、

本人の語りの映像、本人の語りの音声、文字テキストのどの媒体を用いても、受け手の直後の記憶には大きな違いはないが、八か月後には受け手の記憶量も正確性も、語り部本人の生語りを聞いた受け手が著しく高かったことを明らかにしている。そして、その原因として語り手と直接対峙することによる臨場感や場の雰囲気などの環境的要因が可能性として考えられると言及し、可能な限り体験当事者から語りを生で聞くことが聞き手に取って重要であると指摘している。

確かにT夫妻はオンラインでも強く伝わると、場を作りやすいと話していた。対面でも映像でも直後の記憶量が同程度なのであれば、それに付随するメリットが目立つことは当然であろう。では、オンラインでの語りは生語りと映像のどちらに近い効果を発揮するのだろうか。実際、T夫妻からはオンラインでは伝えきれない現場の雰囲気やボディランゲージを気にする発言も見られた。さらには、T夫妻は女川では自らが建てたモニュメントの前で語りを行っており、今井や西坂・古谷（二〇一八）など、震災遺構で語りを行うことやモニュメントそのものが持つ、記憶継承における効果に注目する声も少なからず存在する。本当に臨場感が影響力を持つのであれば、オンラインでの語りは短期的には効果的であったとしても、長期的な記憶の継承には適さない可能性が考えられる。近年では災害をデジタルアーカイブで継承する取り組みも行われている（齊藤・中野・松本・村山　二〇一三）が、この視点を踏まえての活用が必要であるように思われる。

また、学校教育とは対照的に、大学はオンライン授業を実施している。そして多くの大学がオンライン授業についての学生へのアンケート結果を公表し、オンライン授業のメリットとして、理解度が深まったことも挙げられている[6]。先述の佐藤らの先行研究はどの媒体を用いても語りの正確な記憶は受け手の記憶には極わずかしか残らないことも明らかにしたが、語りの複製・再生を行う媒体に焦点を当てたものであるため、リアルタイムのオンラインでの語りについては言及がなかった。期間をあけて大学生の授業内容の定着度を追跡調査すれば、長期的な記憶の継承について、より効果的な知見が得られるかもしれない。

四・二・二　新形式の語りへの期待

ここで注目したいのがT夫妻の語りに度々登場した「種まき」という言葉だ。現場には現場だからこそ伝えられることが存在し、T夫妻もオンラインに一定の価値を見出しながら、やはり女川に来てほしいという想いは強く抱いている。おそらくT夫妻は今後、オンラインで被災地に来られない人に対して、伝えられることを伝えると同時に女川に来るきっかけとなるような語りを行い、新型コロナウイ

ルスの終息後にはこれまで取り組んできたような現場での語りも両立して行うだろう。一一月にはＹｏｕＴｕｂｅ上に語りの動画も公開した。これは新しい災害の語りのあり方の先駆けになるのではないか。東日本大震災を受け、災害の語りと地域の魅力を伝えることが融合し語り部ガイドが成立した。しかし、まだその認知度が低いことも課題として指摘されている。（佐々木・山本・山本　二〇一八）

Ｔ夫妻が自ら話す場を探してオンラインにたどり着いたように、これからは語り部自身が語る相手を、機会を自ら獲得する。それをきっかけにして、オンラインでの語りを聞いた人が被災地を訪れる。このように、マーケティングで用いられるフロントエンドとバックエンドの概念を取り入れたような、記憶の継承が行われるようになる可能性が指摘できるのではないだろうか。機会の数が増えるだけでなく、一度語りを聞いた人が、時間を経て段階を踏んで学びを深めることで、記憶の定着度が高まることも期待できる。こうしてより多くの人に、より深く災害の記憶を継承する語りが行われるようになるという変化が生じているように考えられる。災害の語りが受け身の活動から、伝える相手を見つめだす積極的な活動に変わる。そのような変化のきっかけを、コロナ禍がもたらしたように思われる。

五　おわりに

ここまで見てきたように、コロナ禍というイレギュラーな出来事は、災害の語りにオンラインという新たな手法をもたらした。オンラインでの語りは時間と場所を選ばず、語りを届ける人の幅を広げる効果があると同時に、現地ならではの感覚を共有することや長期的な記憶の継承における課題を有することが分かった。このような限界を示唆する一方で、オンラインとオフラインを両立することで、今まで以上に語りをより効果的に、より多くの人に届けられる、新しい災害の語りの可能性も見出すことができた。

とはいえ、調査対象が過度に限定されていることから、一般性に関してはさらなる検証が必要であるし、本稿の分析が的を得ていたのかが分かるのはかなり先のことになるだろう。この点を課題として残し、本稿を終えようと思う。

註

（1）本稿は「二〇二〇年度調査実習報告書」においての筆者自身の調査報告書の内容を加筆修正し、再構成したものとなる。

（2）日本経済新聞、二〇二〇、「苦境飲食、業態を転換　移動店舗や宅配・持ち帰り」、一〇月一三日

（3）一二月二五日時点の情報では、感染者は四人となっている。

（4）サンテレビNEWS、二〇二〇、「阪神淡路大震災から二五年　小学校や大学などで追悼の祈り」、二月一七日

（5）エドテックジン、二〇二〇、「オンライン授業、大学生等は九〇％以上が受講した一方で小学生では約一五％に留まる【マカフィー調査】」https://edtechzine.jp/article/detail/4546、一〇月九日（二〇二〇年一二月二七日最終閲覧）

（6）茨城大学の授業アンケートでは全て対面で行われた昨年度の第一クォーターの結果と比べて、今年度の同時期の理解度・満足度が向上したという結果が示された。

文献

今井信雄、二〇〇二、「阪神大震災の「記憶」に関する社会学的考察―被災地につくられたモニュメントを事例として―」『ソシオロジ』、四七（二）：八九―一〇四

佐々木薫子・山本清瀧・山本信次、二〇一八、「東日本大震災後の石巻市の来訪者意識にみるダークツーリズムの課題と可能性」『環境情報科学論文集』三二：一六一―一六六

齊藤義仰・中野裕貴・松本利隆・村山優子、二〇一三、「津波被害の記憶を忘れないためのオンライン津波資料館の構築」『情報処理学会研究報告』、二〇一三―DPS―一五四：一―五

佐藤翔輔・邑本俊亮・新国佳祐・今村文彦、二〇一九、「震災体験の「語り」が生理・心理・記憶に及ぼす影響：語り部本人・弟子・映像・音声・テキストの違いに着目した実験的研究」『地域安全学会論文集』三五：一一五―一二四

西坂涼・古谷勝則、二〇一八、「東日本大震災の震災遺構で活動する語り部ガイドの成立及び活動の経緯――宮城県石巻市の語り部ガイドを対象にSCATによる分析を通して――」『観光研究』二九（二）：一七―二八

藤田のどか、二〇二一、「コロナ禍における教育現場」『二〇二〇年度社会調査実習報告書　災禍の記憶／書評論文』神戸大学社会学研究室、六〇―六八

松浦信、二〇二一、「コロナ禍における公立中学校と教師の現状について」『二〇二〇年度社会調査実習報告書　災禍の記憶／書評論文』神戸大学社会学研究室、六九―八〇

矢守克也・舟木伸江、二〇〇八、「語り部活動における語り手と聞き手の対話的関係―震災語り部グループにおけるアクションリサーチ」『質的心理学研究』、七（一）：六〇―七七

女川町ホームページ https://www.town.onagawa.miyagi.jp/（二〇二〇年一二月二七日最終閲覧）

茨城大学ホームページ、「遠隔授業に関する学生アンケートを実施　対面中心の昨年度と比較」https://www.ibaraki.ac.jp/news/2020/08/07010917.html（二〇二〇年一二月二七日最終閲覧）